

雑草と枝花の百花園

岩 城 万里子

時代の移りかわりとともに、育て愛でられる草木の種類も変わっていくのだろうか。

東京都墨田区向島にある史跡及名勝向島百花園（以下略して百花園という）は、江戸時代に梅園としてはじまったものが、のちに春の七草や秋の七草で有名になった名園である。枝花の梅に対して、せりやなずな（春の七草）、すすきやおみなえし（秋草）など、茎が木化しない植物は「草」と総称される。ここでは、梅から草へという百花園の植物の移りかわりを、自然環境の文化史として考えてみたい。

百花園

現在の百花園は、東京都管轄の花園で、籠植えの春の七草の頒布や万葉植物などで知られている。わずか一ヘクタールの平庭に、縄でかこまれた植え込みと藤棚、葛棚、萩のトンネル、水辺などがあり、売店の前庭に梅が数本植わっている。

作家の小沢信男氏は「小学校の運動場ぐらいのところにあれしてあって」と言いつつ、そのわびしいところが「せつなくて愛しい」と言っていた¹⁾。

梅園のはじまり

百花園の歴史については、前島康彦²⁾『向島百花園』（東京公園文庫、一九八一年）に詳しい。

それによると、百花園の初代当主は佐原菊塙という。菊塙は、仙台の生まれでも百姓、天明年間に江戸に出て、芝居茶屋の男衆として奉公したのち、骨董屋を開業、天保二年（一八三一）七十歳で没したと伝えられている。

この菊塙が百花園を開創したのは文化二年（一八〇五）である。骨董の商いに賭博の疑い（一種のオークションの疑い）をかけられたのを気兼ねし、店を息子に譲り渡していたとき、生活のために始めたのが梅園の経営である。向島（江戸時代は武蔵国葛飾郡寺島村）に武家の抱屋敷を買いとった地所は約三千坪であった。

孤山の処士和靖は梅三百六十株を植、標実を售て生活す。梅屋も亦跡を逐て隅田川の辺に荒田数百畝を買て、梅三百六十株を種、一株を以て一日の用とす。花の時に花を賞し熟す時は実を売て世を渡り、其清貧を樂み、人間はんくはの事を羨す。惟自得する所に逍遙せむのみ（佐原菊塙『梅屋花品』推定文化

初年刊⁽³⁾。

菊塙曰く、梅園をはじめたのは、中国宋朝の名士林和靖が梅と鶴を友にしたという中国の故事に習ったという。春は梅の花で客を呼び、その実でもって家計をうるおした。当時、百花園の近くには奇木の臥龍梅をかかえる亀戸の梅屋敷⁽⁴⁾があり、それに対して、菊塙の梅園は、しだいに「新梅屋敷」と呼ばれるようになっていった。

草庭へ

ところが、梅園をはじめて四年目（一八〇九年）ごろのことである。菊塙は、園内の南側に梅林をまとめて縮小し、その代わりに草花を植えていくという百花園の趣向がえに乗り出した。新しく園内に取りそろえた草花には、牡丹、芍薬、菊、あさがお、かきつばたなどの名品もあったものの、熱心に植え込んだものは、『万葉集』『詩経』にあらわれた植物や、諸国名所の名花名草と春の七種、秋の七草などであった。ときには名もない野草を全園に植えることもあったという。

これらの植物を使った造園については、菊塙と親交の深かった江戸の文人たちが采配をふるった。

詩佛・鵬齋・蜀山・真顔・千蔭・春梅の徒⁽⁵⁾、日々此園に訪はれ詰めかけて、彼の樹は此所に植えて、此の草は彼所に移してよ。否、夫れでは却って後來の爲めになるまじ。径路は、池水は、と其度毎に心にもあらぬ争論ひもしつ。其位置を定むるだに月を閲し、我物顔に庭造りしつ。偕て、園内に幾曲の縄張も、

菊塙は、四ツ目垣か柴垣を結むで、豫め心なき雑客が蹂躪に備へまく欲りせしも、かく蔽めしき垣は不要なるべし、竹を伐て一間毎に樹て、之に藁縄を纏ひたらんには、風流にして有興からめと。切て蕨縄か棕櫚縄を、と言ひ出でしも其甲斐なく、藁縄繞をらしぬ。今に於いて然り。『風俗画報』明治三十一年の「隅田堤」の特集、前島康彦前掲書より）

菊塙は、苑路の柵に四ツ目垣か柴垣か、できれば見栄えよく丈夫なものを望んでいたにもかかわらず、まわりの文人たちは藁縄垣がいいと進言し、それならせめて蕨縄か棕櫚縄でと菊塙が願うのも聞き入れず、友人たちは藁縄で押し通し、その質素清淡なことをおもしろがっていたことがわかる。

こうして、年中花の絶えない花園は、文化八年（一八一二）ごろには百花園と呼びならわされるようになり、春は梅で花見客を呼び寄せ、どちらかというと厳寒の春の七種よりも秋の七草のほうがにぎわったらしい。

春の七種は、せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ。秋の七草は、萩、尾花（すすき）、葛花、なでしこ、おみなへし（女郎花）、ふじばかま（蘭）、あさがほ（桔梗）の七草をいう。

同じななくさでも、春は食用を旨とし、秋は観賞を旨とする違いがある。

秋の七草は、秋芳ともいわれ、百花園がときに秋芳園とも呼ばれたことから、菊塙は開園当初から秋の七草の一枚看板で花園をつくる計画をしていたと推察されている。

一方春の七種のほうは、いつごろからか定かではないが、来園者への土産ものとして籠植えされたものが配られるようになり、東京都是今日でも、松の内のお飾りとして宮中に献納するほか、一般人に配ることを続けている。

このように、開園からわずか四年、百花園は梅園から草庭へ、園内の趣向を変えてなおいっそう喜ばれたわけである。

草庭の趣向

文人の動き

菊塙が、中国の古事に習って梅園をはじめたことは先に述べた。

このことは、梅という枝花が古くから大陸風文人趣味に何よりかなう植物であつたことにふさわしい。

桜と違って当時（万葉集の時代）梅を賞でることは、大陸風の文人趣味で、純粹に美的鑑賞の対象であつた。古今集の時代になると、賞翫する心がいつそう微細になり、色よりも香に心をこめるようになり、「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」読人しらず（三三）などと詠み、後世に誰が袖屏風の画題を供した。（山本健吉）

大陸風の文人趣味というのは、都のおかれた奈良や京都の和歌の伝統、貴族たちの寝殿造りの庇や庭園から植物を觀賞していた心映えに通じる。それに対して、粗末なわびしい空間、貧しい暮らしのなかから眺める自然は、芭蕉や蕪村の句に詠まれた草の觀賞に極まっていくという。

俳諧の文化は茶の文化とはかなり違って、侘び・寂びというより侘しさそのもので、そういう生活の中で自然を考えたという気がしますね。それが俳諧の世界で、我々の自然観もそれに影響されている。芭蕉、蕪村は意外に松・梅など我々が自然と考える重要な木には言及せず、侘しいものかあるいは蕪村の空のように雄大なものを詠む。（中略）路地のそばでみた朝顔だとか撫子のようなものを自然だとみて、これと大きな空とか水の流れとかを一体化したようなところで俳句は美意識を研ぎすましてきたと思うんです。（上田篤・多田道太郎「対談 都市の中の自然」『日本の美学7』ペリカン社、一九八六年）

右記の文中「路地」とあるのは、屋内とも屋外とも言えないような、粗末な庶民の住まいを、仮に「路地」と呼んでいる。たとえば、芭蕉が深川に結んだ草庵「芭蕉庵」などがそうである。当時の深川は、遠浅の海辺に小島が点在する地域を火災の焼土や市中のゴミによつて埋め立てた造成地（新開地）であり、水郷のために土地は低く、掘割が巡らされ、萩や芦がいたるところに自生していたらしい（高田衛、吉原健一郎編『深川文化史の研究』上巻、東京都江東区発行、一九八七年）。のちに、小名木川に架かる万年橋からの富士の眺望が、広重の『名所百景』や北斎の『富嶽三十六景』に描かれ、日本の景勝地にかぞえられていった土地でもある。

「古い文化になじんだいい所に庵をくむのとは違って（中略）何もない荒涼とした場所（多田道太郎）」に芭蕉がわざわざ移り住んだ（延宝八年（一六八〇）の冬）のは、京都に「反発をもっていた

(多田) からだとしている。

李下芭蕉を送る

ばせを植てまづにくむ萩の二ば哉

芭蕉(延宝九年(一六八一))

多田

中国では芭蕉の木は、その葉がよく伸び茂るところから、成長・勤勉の象徴でもあったようですが、芭蕉は「芭蕉をうつす言葉」の中でその考え方を拒否し、自分は芭蕉の木の破れやすさのみを愛するといっているんです。つまり、破壊という気分が好きだという言明ですが、彼の愛した自然とは、自然を保護し緑を育てて、都会を一種の鎮守の森にしようといった自然観ではなく、自然が破られていくことに人生の無常を感じ、その一瞬に美的な感銘を受けるというもので、これが我々の心にも深く入り込んでいる美意識じゃないかと思えますね。

上田

コンクリートの割れめから生えている雑草に注視している意識とつながる……。

多田

そうですね。路地というおしつめられた空間にペンペン草が生えていて、それを愛するという自然観だと私は思うんです。

(多田、上田、前傾文)。

破芭蕉のもろさや見苦しき、あるいは不気味さは、永遠普遍を願う中国文化(大陸風文人趣味)には反する。けれども、それは植物が自然に生えて枯れていくさまである。ちなみに、「雑草」という

ことばには、耕作したり栽培したりする以外のいろいろな草という意味のほか、自然に生えたいろいろな草という意味がある(『日本国語大辞典9』小学館、一九七四年)。

百花園の草庭は、人の手によって配植されたものではあるが、園主菊場の親しい友人が藁縄垣で押し通したエピソードでも明らかのように、大名貴族が贅をつくし整然とこしらえる庭園とは違う心持ちを求めて造園されたもので、その趣は、石も使わない平庭に、あたかも野路ができたかのような、草打ち乱れる風情につきるようである。

路の筋も自らなる野路の躰にし、萩・すすき・桔梗・尾花しどもどろに打乱れたるさま、彼の文人墨客の物すきには、麗しく作り立てる花園より一入雅致ありとて、風流めかして花見んと来る人、入れかはり立ちかはり(百花園は)いと繁昌せり。(坂田篁蔭『野辺の白露』)

花の江戸

麗しく作り立てる庭園よりも草々打ち乱れるほうがおもしろい、と文人の指導によってできあがった百花園の草庭は、一方で、江戸の名所案内記のなかに、野草、つまり雑草の案内がはじまることと呼応する。

(江戸の)名所遊覧の案内記に載せるのは、たいてい花木や老樹名木のたぐいであって、『江戸名所花暦』のように、野草をも取り上げる著述は珍しい。「桜草」のすぐ前に「葦草」と

いう項がある。スミレの咲き競っている原で、酒席を設けて一日楽しんだというのは、正に泰平の世ならではのことである(上野益三「絵画に見る江戸の生態観」『忘れられた博物学』八坂書房、一九八七年)。

桜草の群生地は隅田川畔の尾久の原(今は荒川区のうち)であった。『花暦』の挿絵では、江戸の大手の一家が春の日を遊びながら弁当を手に桜草摘みに来ている様子が描かれている。一方スミレの咲き誇っている原は、荒木田の原(現在は千住の北、川に臨む荒木田公園がある)とある。このほかにも『花暦』には「枯野」という項がある。枯野は何処と定むるにあらず。その所々にして風景ありとあって、草々が冬に枯れる風景は江戸のどこにでも見られるが、その所どころによって趣があると解説されている。百花園は、ここでは「梅」と「七草(秋草)」の項にその名が挙げられている。草の名所の一つであったことにちがいはない。

この『江戸名所花暦』(岡山鳥著、長谷川雪旦画)が板行されたのは、文政十年(一八二七)である。

同じころ、しだいに豊かになってきた江戸の庶民の花見の様子が少しずつ変わりはじめてきたと言われている。

桜の観賞でも古くは一本桜の観賞で、多くの寺社に大切に保護された桜の名木があった。『卯花園漫録』によると文化六年前には、鳴子の浄円寺、麻生の長谷寺、小石川の伝通院らに三三本の一本桜があったといい、樹の下で、ゴザを敷いて観賞した。一本の桜を鑑賞するというのは、文化までで、文化から

文政にかけて一本桜の鑑賞にとってかわったのが、集団としての桜の鑑賞である。寺院の境内にある一本桜では、鑑賞する人数におのずから限度があった。一部の風流人、文人墨客といわれる人たちの観賞の仕方であった。(中略)文政ごろには、庶民の生活に余裕ができて、それにふさわしい観賞の方法と場所が求められた。踊の師匠や三味線の師匠が、多くの弟子たちをつれて花見に出たり、花見に茶番がでたりして、庶民的な花見となった。(中略)臥龍梅から梅屋敷の変遷のなかに、このような大衆化現象が見られるように思われる。梅が多くの人たちをひきつけたのは、明治末年までといわれるが、亀戸の梅屋敷も明治年間にもっとも名高い梅園として健在であった(田中正大『日本の公園』鹿島研究所出版会、一九七四年)。

『江戸名所花暦』までは老樹、名木の案内がもっぱらであったとおり、桜の鑑賞も文化までは一本桜の観賞がおもで、それにかわって文化・文政ごろおこってきたのが集団の花見である。たぐさんの花木が寄せ集められ、そこに庶民が集って飲食を楽しんだ。『江戸名所図会』の隅田川堤春風景は、そうした状況を描いたものである。梅木も事情は同様で、先の亀戸の梅屋敷は、はじめ梅の寄木「臥龍梅」一本で花見客を呼んでいたものが、のちに奇木のまわりに梅木を増やし梅林に仕立てて広大な花園「梅屋敷」とした名園であった(注4参照)。

梅も桜も、たぐさんの樹がいつせいにできるだけ長く花咲いているほうが華やかで、大衆は喜ぶ。ゆえに、梅や桜など、老樹、名木の類いは寄せ集められた。その一方で草打ち乱れる河原や百花園も、

それぞれの花の季節になると、江戸の庶民が訪れる花の名所になっていた。

ひるがえって、「江戸」とは「江都」「東都」とも書くように、京都の都意識が東漸してできてきた都市であったが、戦国時代に出現した小京都ほどに京都を規範とする意識は少なく、とくに化政期あたりから、京都の公家的伝統とは異なる、独自の庶民文化の台頭した時期だと言われている（林屋辰三郎編『化政文化の研究』岩波書店、一九七六年）。すなわち、江戸の歌舞伎や食文化（天ぷら、鰻など）と同様に、百花園の草庭も、京都離れの庶民文化のひとつであったと考えられよう。

百花園の衰退と復興——明治末期から昭和初期にかけて

やがて明治末期から大正期になり、百花園の客足が衰えるようになる。向島が工業地に変わっていったことと、新しい遊び場のふえたことよるが、都会の人が古いものを好まなくなったことも大きい。

庭園の危機をまぬがれたのは、小倉常吉氏（小倉石油株式会社社長）の救済があったからで、小倉氏亡きあと、その未亡人のはからいにより、百花園の管理は東京市にゆだねられ、寄付の条件として、佐原家の当主（五代目梅吉氏）に東京市の職員として百花園の管理がまかされた（昭和一三年）。

さっそく、植物学者や名勝・庭園の権威ら識者の指導をあおぎ、初代佐原菊場のあわらした『群芳暦』にしたがって、百花園は江戸時代の草庭に復元され、往時のにぎわいを忍んで、萩のトンネルがこしらえられた（昭和一四年）。

しかしながら、昭和二十年三月十日の東京大空襲からはまぬがれ

ず、一切を焼失してしまう。戦後は、同じく東京都と地元有志の方々の尽力によって、昭和二十四年、いちはやく復興苑地として再開し、あくまでも、秋草の名園として、その風情を失うことなく造園され現在にいたっている。

注

1、小沢信男（一九二七年し）、作家、東京都在住、主著『東京百景』、句集『昨日少年』ほか。

小沢「百花園は」ちょうど、小学校の運動場にぐらいいのところにあれであって、それだけです。お見せするほどのものは何も……。それはやっぱり関西のほうが……。関西はすごいんですよ。なんで、なんで行くの？ いやーお見せしたくないな、お見せしたくない」

岩城「どうしてですか、ご謙遜ですか？」
小沢「いやいや、そうじゃなくて、せつない！ せつなくて愛しいんです」

（一九九七年十一月二九日談）

2、前島康彦（一九一〇—一八八）。元日本造園修景協会常務理事。主著『東京の公園九十年』『日本公園百年史』『日比谷公園』『井の頭公園』ほか。昭和十三年当時、東京市の公園課に勤務し、百花園の園地が東京市に寄付される際の引継ぎその他の雑務を管掌した。

3、佐原菊場があらわした十冊の本は、今日容易に入手できない。戦災で版木のすべてが消失してしまったからである。わずかに、前島康彦氏が終戦の前に和紙に刷りあげた、『春秋七草（種）考』『遊覧誌』『都鳥考』『群芳暦目録』が残存し、『春秋七草（種）考』『群芳暦目録』が復刻されたものの、一九九七年現在、『秋の七草考』は、絶版となっている。

4、文化・文政時代（一八〇四—二九）の梅の名園と言えば、蒲田の梅屋敷と亀戸の臥龍梅があげられる。

蒲田では昔から農民が庭先に梅を植え、梅干しの収穫によって増税をしのいでいた。この梅を、近郊の大師河原（川崎大師）に行く人、神奈川へ行く人、江の島へ行く江戸の人たちが、通りすがりに愛でるようになり、その見物人を見込んで、梅林を始めたのが和中散という薬舗であった。和中散の梅園が梅屋敷として名が知られるようになったのは、文政のはじめ（一八一八）ごろ。近くの梅林から老樹ばかりを買い集めた。農家は梅の実をとるのに古木を必要としていなかったからである。

一方、臥龍梅は梅の奇木である。亀戸のものは、龍が地に臥すように枝をはり、地についた枝から根が生じ、そこから新しく枝を出すというふうにして、まわりに広がっていた。享保九年（一七二四）に徳川吉宗が鷹狩りの途上に立ち寄ったことから、御用木となっていた。寛政四年（一七九二）に、もとの臥龍梅枯れたが、枝から次々と根を出し育ち続けたので、そのまわりに梅樹を植え込んで梅林とし、梅屋敷と呼ばれるようになった。

5、百花園で、秋のを七草、春のを七種と使い分けているのには理由がある。すなわち、正月七日の七種粥が、米、小豆、ささげ、きび、粟、とうし、やまのいも、あるいは米、ささげ、小豆、粟、栗、かき、とうしをいうとしている故実（『拾芥抄』）もあり、米や雑穀、果実を用いたこともあったらしく、必ずしも春の七種が草のみではなかったことに従っている。

6、菊塙の百花園とゆかりのある文人たちは次の通り。

歌人は村田春海、加藤千蔭。学者で狂歌狂文の大家大田南畝。詩人は亀田鵬斎、大窪詩佛、菊池五山。画家は酒井抱一、谷文晁。国学者は三島自寛、片岡寛光、岸本躬弦。茶人の川上丕白。狂歌師は平沢岡持、北川真顔、石川雅望、山崎菅江、小島橘州など。

7、余談ではあるが、芭蕉から時代の下ること約百年——文化・文政時代（一八〇四―二九年）になって、佐原菊塙と親交のあつかった絵師酒井抱一は、百花園の田舎家（戦災で焼失した）の一室に、遺愛

8、の芭蕉像を遺こした。彼はよく百花園に通い、そこでさまざまな文人たちと交わることで、風に吹かれて今にも飛び散りそうな葛や葛、薄などの秋草を描いた傑作『夏秋草図』を完成させたと言われている。集団の花見ということでは、豊臣秀吉が京都の醍醐の槍山で催した桜の花見が最初であろう。慶長三年（一五九八）三月、山城一国をはじめ江州や和州河内あたりから桜の名木を集めさせ、茶店をもうけて、女房たちを招待し、喜ばせた。詳細は『安土桃山時代史論』（日本図書センター、一九七六年）所収、黒板勝美「秀吉と醍醐三宝院」を参照されたい。

